

The Cruel War

——捕虜あるいは濡れ衣の囚人、死と生あるいは別離と再会

吉田英生 (S53/1978卒)

1. はじめに

1960年代後半、筆者は中学生でしたが、1962年のPeter, Paul and Maryの「The Cruel War(悲惨な戦争)」をよく聴きました（そう言えば1961年のディズニー映画「101匹わんちゃん大行進」で恐い女の名前もCruellaだったなど）。また、1966年のイタリア映画「悲しみは星影とともに（原題：Andremo in città——街へ行く）」¹は当時観たこともなかったですが、その悲しいメロディーだけは耳にすることが多く、まだ幼く鈍感な筆者の心にも強く迫りました。そのような記憶を含め、今般のロシアによるウクライナ侵攻で連鎖的に思い浮かんだ悲惨な話題2件を、特に若い会員のみなさまに向けてお伝えしたいと思います。

2. 後藤敏雄 京都大学名誉教授による「シベリア ウクライナ 私の捕虜記」

今般の侵攻が起こらなければ、自分としては一生知ることでも読むこともなかったに違いない本をご紹介します。本学でフランス文学を専攻された後藤敏雄先生(1915–1992)が、第二次世界大戦後、30歳からの3年間ソ連の捕虜となるも1948年に無事帰国されました。「シベリア ウクライナ 私の捕虜記」(国書刊行会 図1)の本文は、帰国直後に書き上げられましたが、後記も追加して整理し直した版が1985年に上梓されました。それを筆者は終戦の日の8月15日に読んでみたのです。

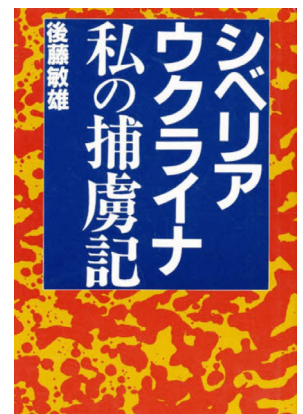


図1 「捕虜記」表紙

全375ページに及ぶ詳細な記録は歴史の証言として貴重ですが、精読するには忍耐を要しますので、細部は飛ばし読みしてしまいました。しかし、そのような読み方でも心に強く残るところは多々ありました。ここでは京都大学との接点に焦点を当てて、印象的な言葉を引用してみたいと思います。

その前に捕虜期間中の概要を図2で説明します（西暦でなく昭和で示します）。

¹ イタリア映画であるにもかかわらず、舞台はユーゴスラビアです。時代背景は、山崎雅弘「第二次世界大戦秘史—周辺国から解く独ソ英仏の知られざる暗闘、朝日新書（2022）などをご参照。用賀扇氏の辛口のコメント <https://boy-actors.com/movies/Andremo%20in%20citta/Andremo%20in%20citta.html> にもあるように映画自体は今一つですが、Ivan Vandor（1932–2020）による悲しいメロディーは比類なきものと思います。

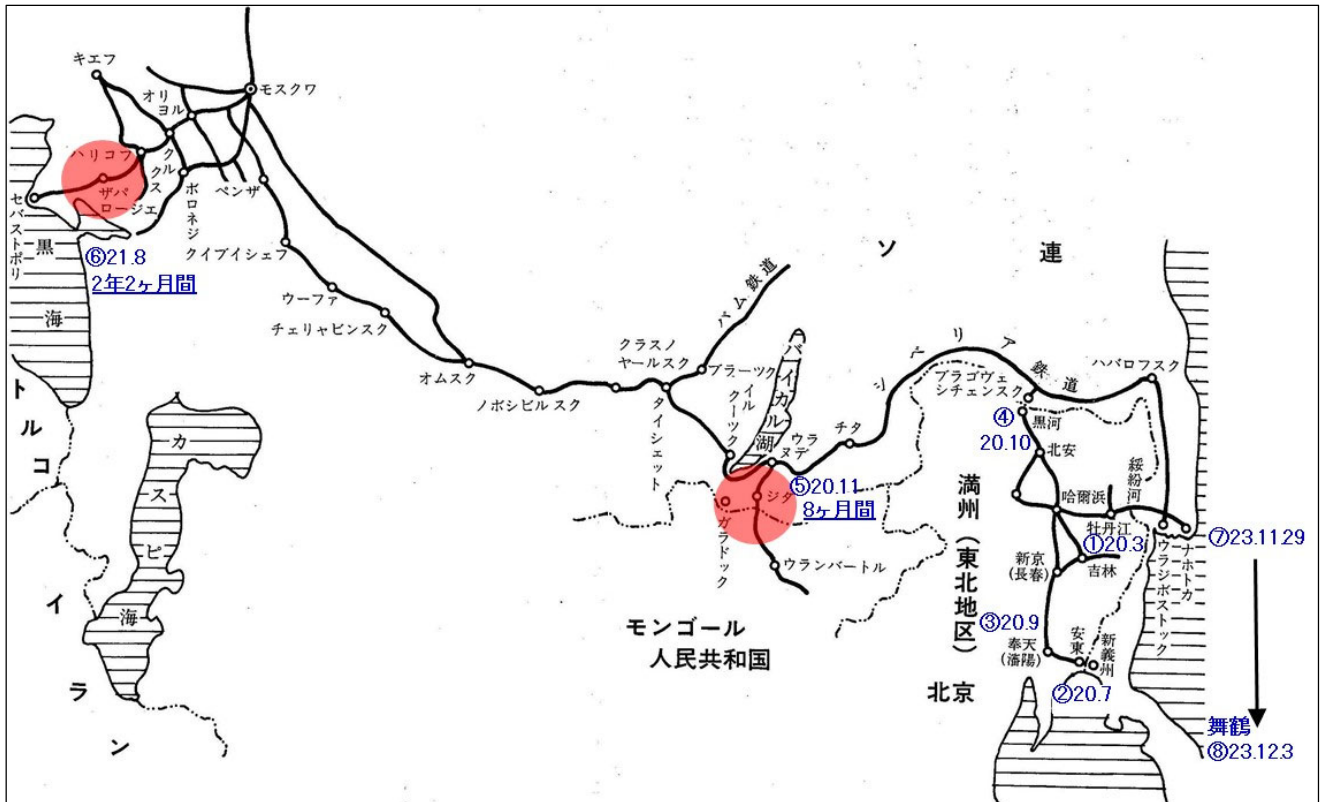


図2 昭和20年3月から昭和23年12月までの満州・ソ連での足どり (pp. 10-11の図に追記)

後藤先生が昭和18年に日本を出て、昭和23年12月3日に舞鶴港に帰国する⑧までの5年半のうち、半分以上の3年は捕虜として転々とされます。主な収容所はシベリア・シダ周辺⑤に8ヶ月、ウクライナ・ザパロージェ（最近、ザポリージャ原子力発電所の危険性で話題になっているところです）周辺⑥に2年2ヶ月です。

まず、「はしがき」に以下の文章があります。

（前略）前記のいろいろな体験記に付された、日本人収容所の分布を示す地図のどれにも、私たちのいた収容所の地名さえ見当たらない。一つの収容所に一つの証言があって欲しいというのが、私の願いである。それが、彼の地で恨みを吞んで死んでいった人たち、幸いに生きて帰ってもシベリア珪肺のような後遺症で間もなく死んでいった人たち、今なおそれに苦しみながら恨みの声も取り上げてもらえない人たちへの責任であり、沈黙を守って死んでいっては、前記の言論人を責める資格もないと思われてくるのである。

（中略）

帰国後私は新制大学の教壇に立つことになったが、当時の学生諸君と私との間には、年齢や体験の仕方の相違はあっても、同じ戦争の経験者として、ある程度共通の意識があったように思う。その後私の受け持つ人たちも、いつの間にか戦争を全く知らない世代になっていった。それらの人たちとの間に断層を感じないわけにはいかないが、歴史に白紙のページはないはずである。

本書はもちろん戦争の特殊な一部分にすぎないが、それは高等学校の社会科の教科書などでは、触れることを意識的に避けられている部分である。そしてだれがどこでどういう教育をしているのか、「悪いことをしたから懲らしめのためにシベリアへ送られたのだろう」と言ったという青年の話を知ると、彼の地に骨を埋めた人ばかりでなく、私のように無事に帰った者さえ、浮かばれない気がする。世の片隅で小さくなって暮らし、黙って死んでいけ、ということなのか。

一方、巻末、舞鶴に向けて帰国の途にある船中での以下の言葉が胸に迫りました。なお羽田亨(1882-1955)総長は、内藤湖南先生や桑原隲藏(じつぞう)先生らとともに、京都帝大の東洋史学の黄金期を築いた先生でした。

船は日本に近づきつつあった。どんな生活が待っているかはわからない。しかし三年間の奴隷生活に耐えたことを思えば、なんとかなって行くであろう。そしてもうすぐ肉親や友人や旧師に会えるのだと思うと、感傷的になってくるのをどうすることもできなかった。特に親しかった友人たちの顔が浮かんできた。思えば三年間ほとんど思い出す暇もなかったのだ。南方へ送られたことがわかっている者もある。無事に生きて帰っているだろうか。私より先に満州へ渡ったところまでははっきりしている者もある。もう帰っているのだろうか。それともまだシベリアのどこかで働かされているのだろうか。そして私とは別の体験をし、私とは別のことを考えているのだろうか。

私はまた京都帝大大学院にいたときの、羽田総長の訓示を思い出していた。私より若い学生が次々と出陣して行き、勉強など手につかぬときだった。「多くの学生諸君が死ぬであろう。しかし全部死ぬことはない。だれかが必ず生き残る。だれが残っても、残った者だけで日本文化の水準を守れるように、一人一人がよく勉強してくれ」というのだった。まことに申訳ないが、その時の私には、安全地帯にいる人の空々しい言葉としか聞こえなかった。しかし今私は生き残って帰る。この戦争で死ぬものと思い定めて、いかに見苦しくなく死ぬかということしか考えられなかった自分が、今さらのように悔やまれた。生きて帰れるとわかっていれば、などという弁解は言えた義理ではあるまい。もっと広く勉強してあれば、同じ体験をしても、もっとまじなことを考えられたかもしれない。わからないことも少しはわかったかもしれない。なぜ生き残るほうに賭けなかったのだろうか。

後藤先生が亡くなられて30年²、本書は貴重な記録であるにもかかわらず、京大内でもほとんど忘れられているように思います(古本もほとんど入手不可)ので、京機短信にぜひとも記録・紹介しておきたいと思った次第です。

3. 蜂谷彌三郎さん、久子さん、クラウディアさん

「クラウディア奇蹟の愛」(村尾靖子、海拓舎 2003、ポプラ社 2006)や「望郷——二つの国 二つの愛に生きて」(蜂谷彌三郎、致知出版社2012)などでよく知られた、日本とロシアの間での辛くて悲しいと同時に感動的なお話です。戦争が夫婦を引き離した悲劇という点では、イタリア映画「ひまわり」とも共通します。

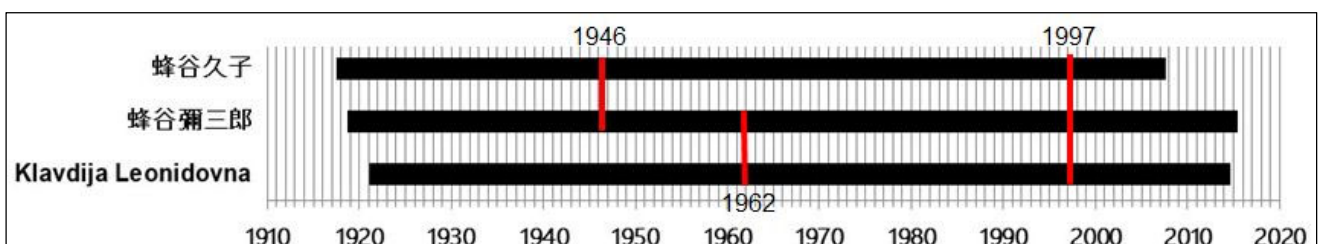


図3 3人の生涯：出会いと別れと再会と別れ

² 山田稔、[追悼文]はじめての訪問——後藤敏雄先生を偲ぶ、仏文研究 1992, 23: 206-205
https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/137782/1/fbk000_023_206.pdf

話の筋はご存じの方も多いと思いますので、ごく簡単に説明しましょう。まず図3に、蜂谷彌三郎(1918–2015)さん、久子(1917–2007)さん、クラウディア・レオニードブナ(Klavdija Leonidovna, 1921–2014)さんの生涯をグラフで示します。滋賀県出身の彌三郎さんは、日中戦争で関東軍に入営しましたが、病気になって広島陸軍病院を経て京都の陸軍病院(現在、東福寺駅近くの東山にある京都第一赤十字病院です; 府庁前の第二ではありません)に入院しました。陸軍病院で看護婦をしていた細川久子さん(鳥取県出身)とは、それが縁で結婚しました。

しかし、平壤で終戦を迎えた後、彌三郎さんが28歳だった1946年にスパイ容疑(ソ連刑法第五十八条)で濡れ衣ながらシベリアに抑留³され、やむを得ず先に帰国した久子さんとは離ればなれの生活を強いられます。彌三郎さんは、その後ハバロフスクで生活しつつも、帰国の目処もつかない中で1962年にクラウディアさんと結婚します。しかし、久子さんとの別れから51年後にようやく彌三郎さんの帰国が実現して再開を果たすと同時に、一方のクラウディアさんとは辛い別れがやってくるという展開です。

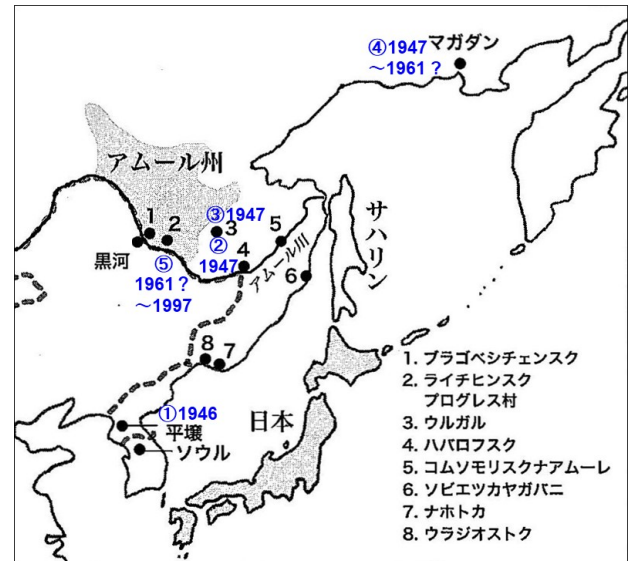


図4 ハバロフスクを中心とする地図
「クラウディアの祈り(前作に加筆した版)」(村尾靖子、ポプラ社2009、p.8)の図に、彌三郎さんの大まかな移動履歴を上書きしてみました。

上記の村尾靖子さんの本2冊と彌三郎さんの本⁴に引用されているクラウディアさんからの手紙は、涙なしには読めません。

(前略) 他人の不幸の上に私だけの幸福を築き上げることは、私にはどうしてもできません。あなたが再び肉親の愛情に包まれて、祖国にいるという嬉しい思いで、私は生きていきます。私のことは心配しないで下さい。私は自分の祖国に残って生きていきます。私は孤児です。ですから、私は忍耐強く、勇敢に生きていきます。

(中略)

1997年 3月21日

クラウディアより

親愛なる彌三郎さんへ

³ 前述の後藤敏雄名誉教授の捕虜記とも共通しますが、以下の貴重な書やホームページを、さらなる勉強の入口として付記します。富田武、「シベリア抑留——スターリン独裁下、『収容所群島』の実像」、中公新書(2016)、また、シベリア抑留者支援・記録センター <https://sdcpiis.webnode.jp/> など。

⁴ 2003年に「クラウディア最後の手紙」(メディアファクトリー)という本が彌三郎さん名で出版されましたが、これは第三者が彌三郎さんのインタビューをもとに勝手に書いた本ですのでご注意ください。彌三郎さんご自身が「望郷」のあとがきで断っています。